

## 第二十三師団、壊滅す

——ジューコフの「傑作」——

秦 郁 彦

第二次ノモンハン事件は小松原第二十三師団長の定義に従えば、日本軍がハルハ河兩岸地区における同時攻勢を決定した一九三九年六月十九日から九月中旬の停戦に至る約三か月を指し、その間に次のような四つのヤマ場をくぐり抜けている。

- (1) 七月二日～五日のいわゆる「バインツァガン会戦」と安岡戦車団の戦闘
- (2) 七月六日から十三日前後に至るハルハ河東（右）岸地区の攻防戦
- (3) 七月二十三日～二十五日の大砲兵戦
- (4) 八月二十日に始まり、月末の第二十三師団の壊滅に至るソ蒙軍の大攻勢（いわゆるジューコフ攻勢）と、失敗に終つ

## た日本軍の逆攻勢

両軍の間には多少の感度差があり、ソ軍戦史では③への言及はあまり見かけない。後述するように、ソ軍の砲撃ペースは前後の時期とさして変わらず、日本軍の砲撃による損害がほとんどなかったためであろうか。八月二十四日から開始された日本軍の逆攻勢も、ソ蒙軍の猛進撃にかくれてしまったのか、ことさらに意識した形跡はない。

さて既述の①にひきつづく②は七月三日にハルハ河を渡河した第二十三師団が、ソ軍機甲部隊と遭遇戦を演じたあと一本だけの軍橋でかろうじて右岸（東岸）へ転進し、右岸の川又地区を固守するソ蒙軍との間で展開した攻防戦である。

二日から四日にかけて攻勢をかけた安岡戦車団は戦車の半数を失ない後退したが、転進してきた小林歩兵団は疲労してはいても健在だったので、残存戦車と野砲13の支援下に西から東へ歩26、歩64、歩72と並べ、ホルステン川の南岸には歩71（長野支隊）を迂回させ、川又地区のソ蒙軍陣地を挟撃しようとした。

しかし、左岸のハマルダバ高地（標高八〇四m）周辺に陣どるソ軍重砲隊は五〇m以上の比高差を利用して、眼下の日本軍に猛射を浴びせる。五月末に山県支隊、七月初頭に安岡支隊が置かれたのと同じパターンの再現になった。対抗しうる砲兵力の乏しい状況に直面して小松原が編み出したのは、歩兵の夜襲で敵の縦深陣地をひとつずつ突破し、明け方には敵砲火を避けるため奪った拠点を捨て発進卓まで後退する、しかもこのピストンの夜襲を数日にわたり強行しようというのだ。

その間にハルハ河畔まで迫り敵の軍橋を破壊するか占領し、あわよくば対岸の台地にとりつけたら、補給を断たれ

る川又のソ軍は干上るはずだと期待した。

しかし夜襲は日本陸軍のお家芸とはいえ、昼間でも地貞標定が狂いがちな波状の砂丘地帯を、隣接部隊との連係を保ちつつ暗夜に行動するのは容易ではない。七月九日にノロ（七四二）高地に進出した歩71が、標定ミスで実はその東南方七五八高地とわかり改めてノロを十四日に占拠したのは一例である。

そのうえ、夜明け前の後退を想定しての前進には、心理的なブレーキがかかるのは避けられない。実際に猛進する隊もあれば、途中から引き返す指揮官もいて、戦力の集中発揮は困難となった。守るソ連側から見れば、日本軍は「昼間に前進しても夜間に後退せざるを得ず」（ジューコフ報告書）である。

それを予見できなかったのか、師団や関東軍の上層は、最初から楽観的先入観にひたっていた。総攻撃は七月七日の夜襲で始まったが、この日関東軍は中央部へ「左岸にある敵砲兵の妨害あるも、右岸の敵を撃破するは時間の問題なり」と伝え、九日には「今日、明日位の攻撃を以て、右岸を占領し終るべく」と予想し、安岡戦車団の解組と原駐地への帰還命令を内示していた（実行は延期されたが）。

現場でも八日朝には直協偵察機から右岸のソ軍に退却の兆があると通報された小林歩兵団長は追撃命令を発するが、すぐに誤報と判明し取り消した。皮肉にも関東軍司令官から「七日の夜襲及爾後に於ける追撃の成功を祝す」という電報まで届くが、当の小松原師団長は「八日の夜襲成功せず」と日記に記入している。敵退却の誤報にせよ、祝電の到来といい、似たような先例をくり返していたわけである。

それでも一部の部隊は猛進して暗夜の白兵戦に恐怖した敵を撃破、川又地区の敵拠点を次々に占領するが、ソ軍の砲撃が始まる夜明けには放棄して後退せざるをえなかった。たとえば歩64は八日の夜襲で河岸に近いミツボサ高地を

占領したのち半時間後には後退、翌日夜に再び占領するが夜明け前に退去している。さらに十一日夜、ソ軍の最重要拠点となっていたバル西（七三三）高地を占領、追撃をつづけたが十二日午後、山県連隊長へ後退命令が届く。同様の師団命令は、全部隊へ送られていた。山県はあと一日の攻撃続行を嘆願したが容れられず、翌日朝までに発進点へ戻った。

その間に師団は軍橋の爆破に執念を燃やし、ソ軍の間隙を縫いながら八チームの爆破班を潜行させたが橋を守る歩兵や戦車に阻まれ、成功したのは二チームにすぎなかった。

七月八日の深夜二時頃、敵中を潜入してハルハ河岸に到達した歩72の高山爆破班（高山正助少尉、工兵を含めて約六〇人）の成功例を見よう。高山班は河の中洲に露営していたソ連兵に推何されたのを、片言のロシア語で「偵察の帰りだ」とごまかし、軍橋に近づいた。高山は爆破のようすを次のように証言する（要旨）。

橋のたもとに歩哨が二人立っている。手榴弾を投げつけて倒し、橋にかけ上った。中央より少し先まで行き、厚さ七、八センチもある橋板に携行した五ガロンかんのガソリンを流し、10 mおきぐらいに方形爆薬を撒き、マッチで火をつけ爆破した。中洲のソ兵が射ちまくってきたが、あとは逃げるだけ。司令部へ報告に行くと、火柱が見えただがあれがそうだったのか、と喜んで食べかけのヨウカンをくれたりしました。<sup>③</sup>

その頃、ソ軍工兵はすでに9本前後の軍橋を架け、事件終結時には28本に達していたとされる。<sup>④</sup> なかには水面下40 cmに架けた「水中橋」もあり、爆破されてもすぐに修復したとジューコフ報告書は強調している。

こうして七日に発起した第二十三師団の力攻めは十二日の後退命令で休止となり、やはり苦境におちいついていたソ連軍も一息つく形になった。ジューコフ報告書、コロミーエツ、シーシキン、ノヴィコフの記述を総合すると、七日の夜襲第一波は不意打ちだったらしく、狙撃149連隊と第9装甲旅団は大混乱におちいり、味方撃ちさえ起きた。

翌朝、日本軍が前進を中止したので態勢を建て直すが八日午後、レミゾフ狙撃149連隊長は砲弾の直撃を受けて戦死した。レミゾフはソ連邦英雄の称号をもらい、バル西高地はレミゾフ高地と名づけられた。

急報を受けたジューコフ司令部は、直ちに狙撃24連隊、狙撃第5旅団、さらに第7装甲旅と狙撃603連隊を西岸から増派する。603が所属する狙撃第82師団は六月にウラル軍管区で編成されたばかり、ボルジアから三〇〇kmを徒歩でかっつけてきた。訓練不足で兵士の二割は小銃を実射した経験もなしに投入され、十日の戦闘では数発撃ちこまれるとパニックを起こし火器を捨てて逃げまどった。ジューコフ報告書によれば、上官への反抗や自傷行為も露見し、再訓練と軍法会議で取調べるため西岸へ戻されたが、「なぜこんな弱体師団を投入したのか」という非難の声があがったという。

十一日夜にもバル西高地の争奪戦で狙撃第5旅団の一部が潰走し、それを食い止めようと「戦車からはい出し、手榴弾を手にして突撃を下令した」ヤコブレフ戦車第11旅団長は「負傷後絶命するまで戦闘を指導」<sup>5)</sup>(ノヴィコフ)し、賞讃されてソ連邦英雄の称号をもらう。

この攻防戦で日本軍が蒙った人的損害は、小松原日記によると二二二二人(うち戦死五八五)で、投入兵力の23%と概算されている。ソ軍の損害もそれを上まわったと推測される。折から現地視察に来たクーリク国防人民委員代理は、困難な戦況を見て東岸部隊の撤退を命じたが、ジューコフは強硬な反対意見をウオロシーフ国防相に送り、クーリ

クは独断で戦闘指揮に介入したと譴責されたうえ、七月十五日付の命令でモスクワへ召喚されたという。<sup>(6)</sup>

### 大砲兵戦（I）

七月十二日小松原師団長が指揮下の全部隊へ発した後退命令は、従前のような戦術上の駆け引きとは性格を異にしていた。攻撃中止は大砲兵戦を決意した関東軍司令部からの圧力によるもので、小松原自身は「今一步の処にて師団の現状維持、（砲兵の）攻撃準備の命令に接し……無念思うべし……大乘の見地より昨日の如く命令せり」と日記（十三日）に書きとめている。

砲兵団長として着任した内山英太郎少将や寺田参謀との十一日の協議でも、内山から有力な重砲部隊が十九日まで展開するので、歩兵部隊はその援護下で進撃するため一時後退すべきだと主張した。これに対し小松原は攻勢が成功しつつあるので夜襲を継続し、砲兵は來着しだい逐次戦闘に加入させてはどうかと申し出た。だが寺田から砲兵主体の攻撃は植田軍司令官の強い意向であり、左岸台上の敵砲兵さえ撲滅できれば、右岸の敵陣地は勞せず撃滅できるだろうと述べ、内山の主張を支持した。

軍司令官の名を持ち出されては、小松原も引き下るしかなかったのだろう。十二日に歩兵各隊の後退を指示する師団命令（前述）の発出となったのであるが、関東軍が歩砲共闘を望むなら七月七日の攻勢は延期して重砲の到着を待つのが常道であろう。

そもそも野戦重砲二個連隊の満州派遣は、不拡大方針をとっていた大本營の発意だった。橋本第一（作戦）部長と稲田作戦課長はともに砲兵科の出身で、関東軍が連絡してきた攻勢計画に砲兵力が足りないことや、ハルハ西岸に布

陣したソ軍重砲の脅威を気にかけたのだろう。野重7の一兵士は「大本営がこの地形を知ったら戦闘をやらせなかつたかもしれない」と臆測するが、兩人にはおそらく現場の比高差は念頭になかつたと思われる。

ともあれ六月二十二日に第一部長名で関東軍参謀長へ「貴軍の企図せらるる蘇蒙軍膺懲に於ては敵兵力及第二十三師団の装備に鑑み十分なる兵力特に砲兵を使用するを要するものと考え」た結果、内地から野戦重砲二個連隊を派遣すると通報した。早くも二十四日には上奏裁可、動員下令となり、二十六日には稻田作戦課長が畑侍従武官長へ「ノモンハンに使用せらるる公算が多い」と連絡している。ところが関東軍が中央の「親心」を歓迎した形跡はなく、七月初頭のハルハ渡河作戦に間にあわせようとする着意もなかつたようだ。

本件ばかりでなく関東軍は八月末に至るまで自前の兵力だけで戦う意気ごみで、同じころ第五師団の増派を打診されても辞退するくらいだつた。中央に借りを作りたくない心理からだが、さすがに重砲の増加を辞退する勇氣はなかつたらしい。このあたりの対応ぶりは、旅順の要塞攻めに二十八サンチ砲を送りこんだ時の大本営と乃木第三軍とのやりとりを連想させる。

ともあれ野重第一連隊と同第七連隊が駐屯地の千葉県国府台を進発した七月六日、関東軍は若干の在満砲兵部隊を加えた砲兵団を編成し、団長に関東軍砲兵司令官の内山少将を補任した。それにしても、七日に発動を予定した第二十三師団の夜襲攻勢計画とすり合わせる発想がなかつたのは、奇異としか思えない。

さて野戦重砲兵第三旅団（長は畑勇三郎少将）に編合された野重1と野重7は、鉄道―船―満鉄線と乗り継ぎ、ハイラルを経て十九日前後に前線へ展開した。

畑旅団長は「当時の最新式自動車（牽引）砲兵として稀少価値の虎の子扱いを受け、温存された国軍最精鋭の砲

兵」により「重大な使命感と内心の抱負を以て敵砲兵を完全殲滅<sup>10</sup>」しようと思気こんでいた。

十八日に策定された砲兵団の戦闘計画には「攻撃第一日に全砲兵をもって一挙にソ軍の砲兵を撲滅し」とあるが、内山砲兵団長が直前の空地打合せ会議で「二時間くらいで目標はなくなるだろう<sup>11</sup>」と壮語するのを、空中観測担当の飛行士が聞いている。苦闘つづきの小松原ら師団将兵の期待感が高揚したのもむりはない。

しかし不安材料がないわけではなかった。畑司令部から先遣された岩田正孝砲兵大尉は、新京の関東軍司令部に立ちよったさい「予備をふくめて砲兵戦に用意している砲弾は七基数」と聞き、「へえ、それだけしかないのか<sup>12</sup>」とがっかりしている。

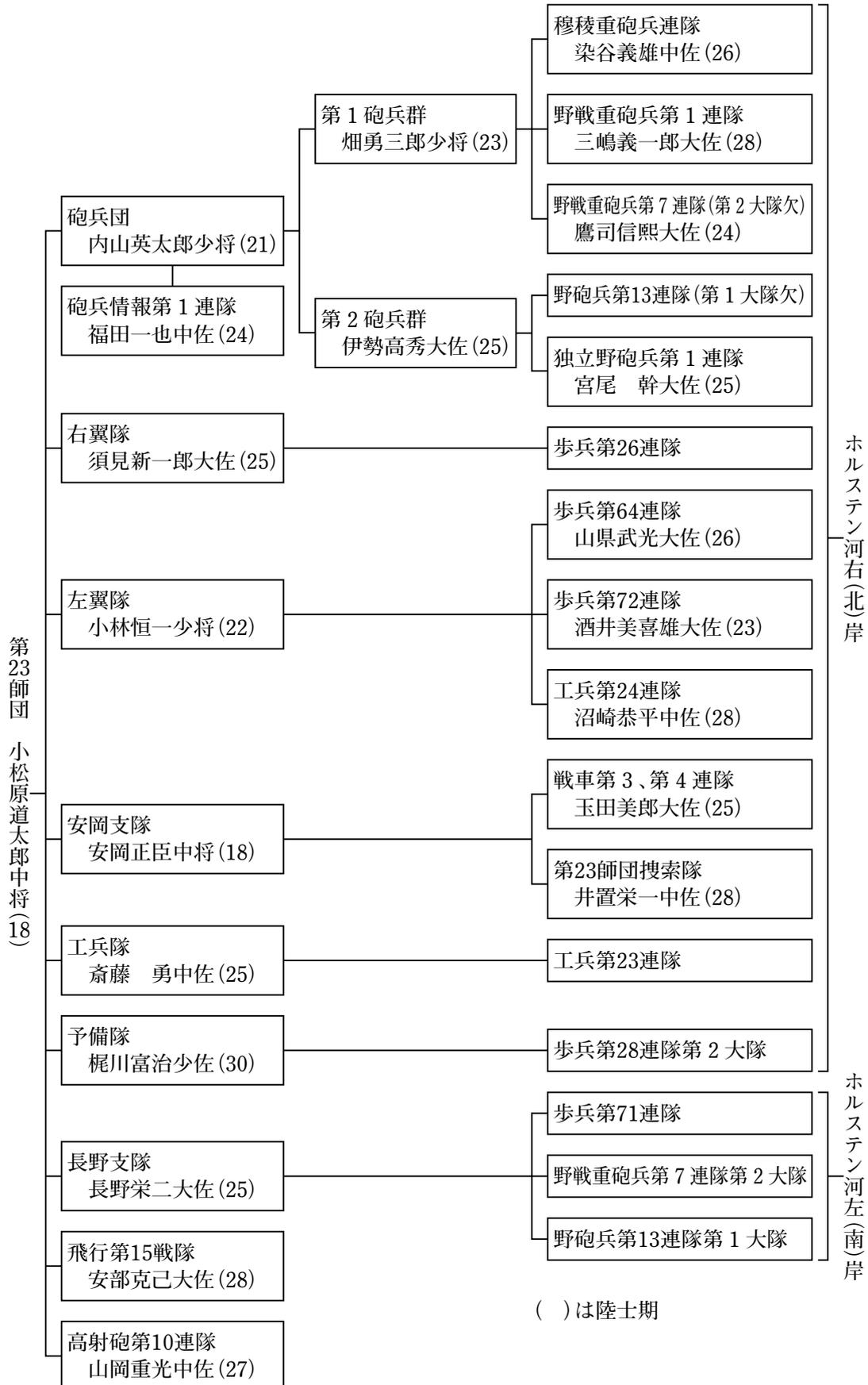
基数とは砲一門あたりの弾数で、一基数は七五ミリ野砲で一〇〇発、十五センチ榴弾砲で五〇発、十五センチ加農<sup>カノン</sup>砲だと三〇発だが、連射すると一時間足らずで撃ちつくす量にすぎない。最終的に関東軍が供給したのは内地からの携行分をあわせ一會戦分の五基数で、砲兵団はそれを初日に二基数、第二、第三日に各一・五基数と割りふった。

第一次大戦後、先進国の砲兵は目標の面積当りにつぎこむ鉄量（トン表示）で必要量を算定するようになっていた。とくにソ連陸軍は「近代戦の主要構成要素は火力であり……その成否は物的準備の適否に左右される。指揮官及び幕僚の最大の責務は、常に十分な兵器資材を整備前送することにある<sup>13</sup>」（一九三六年の赤軍野外教令）という火力万能主義を高唱し、一斉砲撃の標準弾量はドイツやフランス軍を上まわっていた。

それに対し、歩兵を「軍の主兵」と位置づけ、白兵戦術を信奉した日本陸軍は支那事変の連勝でその確信を深めた。必らずしも砲兵を軽視したわけではなく、三九年三月の南昌攻略戦ではノモンハンを上まわる90門の重砲で中国軍を圧倒している<sup>14</sup>。

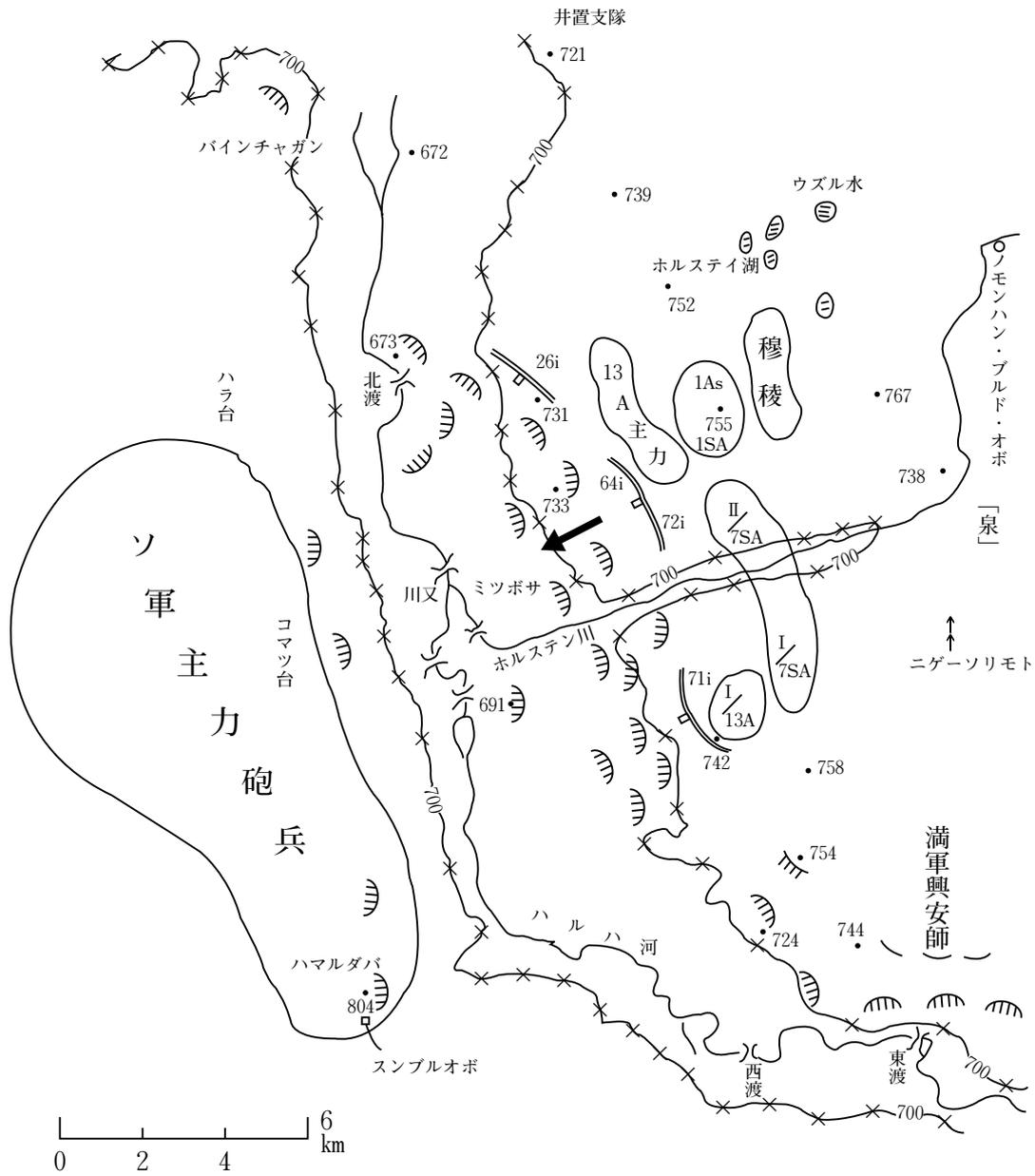
表1 砲兵戦時の日本軍の編成 (1939年7月23日～25日)

第二十三師団、壊滅す (秦)



九七 (二五二)

図1 7月23日の日満ソ蒙軍配置



出所：『関東軍〈1〉』付図を補正

- $\frac{1}{13A}$  : 野砲13連隊 I 大隊
- 1As : 独立野砲1連隊
- 71li : 歩兵71連隊
- 1SA : 野重1連隊
- 7SA : 野重7連隊
- ☺ : ソ蒙軍

しかし拡充の重責は連隊の新設（砲数の増加）に向けられ、砲弾量は日露戦争時の節約規準（基数）を適用しつつ、欧米流へ発想を切りえる気はなかったらしい。

不安材料は他にもあった。後知恵ではあるが、虎の子の重砲二個連隊は「実戦の体験者が皆無に近く、訓練も精到と称するには程遠い実情<sup>15</sup>」ではあったと畑は洩らしている。

そのせいか、土地勘の乏しい砲兵団には、それまで日本側を苦しめてきた不利な地形条件は、さして念頭になかったようだ。図1は砲兵団の配置状況を示すが、最前方の砲兵陣地からハルハ左岸の至近目標まで6～10 km、最奥部までは17～18 kmと推測された。砲撃の基準点はハマルダバ高地に立つスンプル・オボの石柱（ソ軍は砲撃戦が始まると撤退）としたが、五〇mの比高を持つ左岸台上の砲分布はわが観測所からの見通しがきかない。

それに対しソ連側は五月らしいの戦歴から、東岸のわが歩砲兵陣地周辺のデータは知悉していて、「ノモンハン（ブルド・オボ）以西の地区は左岸から丸みえ<sup>16</sup>」も同然だった。

こうして「建軍いらい」と誇称する大砲兵戦は、予定より二日おくれた七月二十三日朝に発動される。約二時間の「猛射」のあと歩兵三個連隊（歩26、64、71）の前進が始まった。

## 大砲兵戦（Ⅱ）

野戦重砲による左岸砲撃の初動状況を、畑第一砲兵群長の手記から引用したい。

六時三十分、敵砲火を誘致してその位置を確認する目的で、まず我が野砲兵隊の射撃を開始するや、敵砲兵は拳

げて盛んに応戦発火した。

敵砲兵の発火により、予定目標の現状を十分に確認掌握して、同七時三十分から全砲兵一斉に対砲兵戦を開始し、砲声殷々としてハルハ河畔の天地にとどろき、蒙北の砂原を震動し、我が第一線歩兵隊は、待望の威力重砲兵の連続猛射による大爆音と敵陣地内に上がる大砂塵を望見して歓喜の声を上げ雀躍の拍手を呈した……敵砲兵を圧倒し、沈黙するを散見し、十一時から我が歩兵は勇躍して攻撃前進を開始し……<sup>17</sup>

右のうち傍奥部分を説明すると、「発火」は、地形的に敵砲兵の位置を視認できないため、わが砲撃に応射する時の閃光で測定する手法を指す。それでも奥行きまでは計測できない弱奥は残った。「敵砲兵の沈黙」とは我が砲弾による命中破砕のためだろうと喜んだが、それは目視可能な左岸台上の河岸陣地に限られ、その間に奥地へ陣地変換したらしいソ軍の砲兵はまもなく砲撃を再開したことを指す。

わが重砲陣は稜線に遮られた低地に放列していたため、直撃弾で破壊された砲は少なかったが、川又に向け昼間の前進行動に移った歩兵部隊はソ軍の集中砲火を浴びて動きがとれず死傷者が続出した。

歩64Ⅲ大隊の一小隊長は、「壕を出て攻撃前進を開始すると、ものの四、五十メートルも行ったところで、ものすごい機関銃弾と戦車砲弾です。友軍の重砲が三、四時間も撃ったんだからもう撃滅したと思った敵の砲兵が全然衰えていない。後続部隊は壕を出るに出不られず……われわれも射すくめられたような形で、頭も上げられない<sup>18</sup>」と回想している。

他の連隊も似たりよつたりの苦境に立ち、夜襲に切りかえて川又をめざしたが、守るソ軍も一段と防備を固めてい

表2 日ソ両軍の砲兵力

I 日本軍 (1939年7月23日現在)

a. 部隊名	b. 砲種×砲数	c. 準備弾数	d. 7/23～7/25の射耗	e. 最大射程(m)	f. 目標
1 野重第1連隊	96式15榴×16(2)	4,000	3,116	11,900	西岸
2 野重第7連隊	92式10加×16(3)	4,800	4,562	18,200	〃
3 穆稜重砲連隊	89式15加×6	900	1,172	18,100	〃
4 独立野砲第1連隊	90式野砲×8(1) (75ミリ)	4,000	4,674	14,000	〃
5 野砲第13連隊	38式75ミリ×24(4) 野砲	12,000	5,654	8,350	東岸
6 〃	38式12榴×12	3,600	1,310	5,650	〃
計		29,300	20,488		

15榴=15センチ榴弾砲(曲射) 10加=10センチ加農砲(平射)

出所: b、cは『関東軍<1>』、dは14年7月29日付関東軍参謀長発参謀次長、陸軍次官宛関参三電481号(陸満密大日記)

注(1) 1～3は重砲(計38門)、4～5は軽砲(計44門)

(2) cは各5基数

(3) 他に連隊砲(41式75ミリ山砲)16門(定数)、大隊砲(92式70ミリ歩兵砲)24門(定数)があった。

(4) bの( )は損耗

(5) 1発当りの重量は15榴が31kg、cの全弾量は296トン

II ソ連軍

a. 部隊名(最大射程)	76ミリ野砲 (9,300m)	122ミリ榴 (11,800)	152ミリ榴 (17,000)	152ミリ加 (30,000)	計
1. 第82砲兵連隊	20	16	—	—	
2. 〃	—	12	12	—	
3. 第175砲兵連隊	8	16	—	—	
4. 第185砲兵連隊第Ⅲ大隊	—	—	—	12	
5. 第5狙撃機関銃旅団砲兵大隊	4	8	—	—	
計	32	52	12	12	108

出所: ジューコフ最終報告書 p.640

注(1) 他に60～70門の連隊砲があった。

第二十三師団、壊滅す(秦)

一〇一(二五五)

たため攻めあぐね、死傷約三千人の犠牲を払って七月十二日の進出線を回復するのがやっとであった。その間も予定どおり三日間の砲撃はつづけられたが、ソ軍砲兵の応射は「依然猛威を奮い、火力さらに衰えず」（二十四日の小松原日記）だった。

さすがにわが砲撃効果に疑問を感じたのか、二十五日には気球を揚げて空からの観測を試みたが、飛来した敵戦闘機に観測将校もろとも撃墜されてしまう。その日の午後、準備した五基数の砲弾をほぼ撃ち終って「大砲兵戦」は打ち切られた。各砲兵連隊は砲撃続行を願ったが、砲弾を補給してもらえないあてがなかったので、自然休止という形にせざるをえなかった。

戦後になっても砲兵団の参戦者に挫折感があっても、敗北意識が見られないのは、まずまずの成果は挙げている。関東軍の都合で打ち切られたという思いが残るせいかもしれない。たとえば畑少将は砲兵情報連隊の測定分析を援用して、「完全破壊を確認した敵砲数は24門、他に損傷させたもの20余門で……三日間で敵砲兵戦力を半減せしめた<sup>19)</sup>」のに対し、わが重砲の損失は2門のみだったと強調する。明言はしないが、一種の勝利宣言とみなせよう。

野重1の三嶋連隊長はやや控え目ながら、日本の「判定勝ち<sup>20)</sup>」と評しているが、「我砲兵の装備は貧弱……火砲の射程に於ても我劣れり」「敵の遮閉砲兵の位置の捕捉は不十分にして……与えたる損害は恐らく僅少<sup>21)</sup>」（砲兵団高級部員の正木義人大佐）という辛口の反省もある。

ここでソ側から見た砲兵戦の実情と比較したいが、前述のように問題意識が薄かったせいも、情報は乏しい。表2は日ソ両軍の参加部隊名と部隊別の砲力を示したものである。比較すると重砲（10センチ以上）では日本の38門に対しソは76門だから約二倍である。射耗弾量はソ連側のデータを得られないが、わが一発に対し三発（須見歩26連隊長）

あるいは五発（岩田大尉）の割合で撃ち返されたとの印象からおよその規模を察しうる。<sup>22</sup>

しかも弾量の過半を日本軍の歩兵部隊へ集中させることで、失地回復を狙う日本軍の攻勢を阻むと同時に、味方の右岸橋頭堡を援護するという二重の目的を果している。ジューコフ最終報告書は、砲兵戦の実態を次のように淡々と記す。

敵砲兵は優秀な測量隊を持ち、航空写真も活用して精度の高い地図（2.5万分の1）を準備した。わが方をしのぐ長射程の重砲は、有利な観測地と射撃陣地に恵まれていたのに、訓練は不十分で、とりわけ歩兵との関係は拙劣だった。

七月二十三日に敵砲兵はわが重砲陣の破碎を狙って約一万発と推定される大量の砲弾を撃ちこんだが、ハルハ河西岸に沿った15〜20 kmに広くばらまかれ、多くは空き地に落下した。われわれの砲兵陣地を標定できなかったためか、一日かかっても敵は一個砲兵中隊も制圧できず、歩兵（東岸の）にも損害はほとんどなかった。<sup>23</sup>

どうやら日本軍砲兵は高レベルの砲と観測器材を持っていたのに、ソ軍砲兵の位置がつかめず、弾着修正もできぬまま散漫な探り撃ちに終始したといえそうである。地形上の弱点を補なう弾着観測の決め手は飛行機しかなかったが、事前の共同訓練もせず、空地の通信連絡は不調だったようだ。

それでも飛行第15戦隊の九八式直協機が敵地上空に飛び、ある重砲中隊の砲撃に対し上から弾着修正を試みた。だが射弾がそろわずバラバラなので、観測将校が「そんなヘタな射撃やめてしまえ<sup>24</sup>」と無線でどなりつけ帰ってきたと

いうエピソードもある。

日本軍は空き地に砲弾をバラまいたというジュコーフ報告書の観察を裏書きするものだが、敵戦闘機や高射砲火をかいくぐって飛ぶ少数の直協機に頼って弾着修正をやるうとする手法にむりがあったとしか言いようがない。

半年後に大本営研究班の主任として戦訓調査に当たった小沼治夫中佐はそのメモで砲兵団の弱点を、

1. 距離遠し（二万以上）。
2. 我低敵高観測困難、飛行機偵察、気球おとさる。
3. 砲兵将校能力劣る。射向1キロひろがり、（砲弾が）集まらぬ中隊あり。
4. 敵砲兵予備陣地や掩砲所にかくれる。牽引車にて後へさがると総括している。

おそらく砲兵戦の結末にもっとも落胆の思いを味わったのは、小松原師団長であったろう。彼は七月二十六日の日記に悲痛の思いをこめて「砲兵の効果予想に反せり……何等砲兵の助力を予期せずして（歩兵の）攻撃続行せざりしやを悔む 我過<sup>あやま</sup>てり」と書き入れた。

すでに二十五日午後小松原は、島貫関東軍参謀が持参した築城実施の前日付軍命令を受け、「膺懲の目的を達した」（第一項）として「師団は軍命令により、ハルハ河右岸残敵掃滅の完成を待つことなく、速やかに爾後の築城を準備せん」（第二項）とする二三師作命甲第一四八号を<sup>25</sup>下達していた。

主旨はややつかみにくい<sup>26</sup>が、小林歩兵団長は「軍の方針一変して、力攻めせず現地を確保したるまま陣地構築を開始する」という守勢持久への転換と受けとったようだ。

では砲兵戦の終了と成果を確認してからでもおそくないのに、なぜ関東軍は砲兵戦の第二日目という早い段階で新方針を打ち出したのか。島貫はのちに「関東軍としては砲兵戦を開始する前から、一段落したあとどうするかを考え、成否に関わりなく越冬のための築城を検討していたのだ<sup>(27)</sup>」と弁明する。

たしかにホロンバイルの夏は四〇度前後の酷熱だが、典型的な大陸性気候のため八月末になると深夜は零度以下まで冷えこむのも珍しくない。夏服で鉄条網も張られていない粗末な壕内に身を置き、戦っている兵士たちの越冬対策をそろそろ考慮せねばならぬ季節になっていた。

その場合、ハイラル地区か少なくとも將軍廟付近まで退いて、耐寒設備のある兵舎に収容するのが常識的だったろう。駐ソ大使館付の土居駐在武官が「ハルハ河より適宜離隔せる位置に、至短時間に最も堅固なる陣地を構築<sup>(28)</sup>」すべきだと進言したのも、それを示唆したものと考えられる。防勢に立つのなら、敵の砲撃圏内に築城するのは非常識にすぎるからである。

だが係争中の「右岸地区を確保すること絶対必要なり<sup>(29)</sup>」と決意していた関東軍には、その種の選択はありえなかった。島貫が伝達した築城命令も、「砲兵戦によつて敵砲兵が撃滅されること<sup>(30)</sup>」を前提にしていたと考えれば、その後の築城が中途半端のまま、ソ軍の八月攻勢を迎えたのも不可避だったと言えようか。

いずれにせよ現進出線から引き退ることなしに「諸隊は依然前任務を続行すべし」（前出の作命甲一四八号）と命じられ、疲れはてた第二十三師団の兵士たちは、左岸重砲の砲火をしのぎつつ右岸に張りついているソ蒙軍と戦い、合間を縫って冬営用の築城工事を進めるほかなかった。

### 嵐の前の静けさ？

予定量の砲弾を撃ちつくして攻勢を休止したノモンハンの日本軍には、しばし閑散の日々が訪れたかに思えた。

小松原日記には「噂されし八月攻勢の企図も見えず。戦線概して平穏なり」（八月五日）、「戦線平穏」（同十二日）のような記事が散見する。小林少将も「砲撃閑散なり。本日より砲兵爆薬の使用、野砲は一門十五発、九〇式野砲は五発、その他重砲は十五発内外に制限さる」（七月二十九日）と書いている。

実はソ蒙側にとってこの三週間余は休息どころか、八月二十日の大攻勢発動に向けた諸準備の仕あげ過程であったが、そうと覺られぬための配慮は忘れていない。たとえば築城工事を妨害するかのようになり、第一線陣地への砲撃は続行するが重卓なしに万遍なくばらまいていた。

八月四日からノロ高地の守備についていた長谷部支隊のある中隊長は、「小丘の斜面に各個掩体を構築、来る日も来る日も、敵の砲弾下……但しこの砲弾は数知れずでしたが、中隊は一名の損害も出さなかった。なんでこんな無駄弾を撃つのか<sup>(31)</sup>と、敵の意図をはかりかねていた。

また主としてノロ高地を焦点にホルステン南岸へ、戦車を伴う歩兵が局地攻勢を二度（八月一〜二日と七〜八日）にわたり仕掛け、陣地を固守する日本軍と激戦を交えている。

長谷部支隊の戦記は「五日から八日まで猛攻撃を加えてきたが、その都度こつびどく撃退され……以後十九日まで陣地奪取までの積極的攻撃はみせず……十七日頃にはピアノ鋼線の鉄条網をはりめぐらせた数線の陣地を作りあげた<sup>(32)</sup>」と記すが、ソ軍は威力偵察を兼ね、後日の足がかりを作ったのであろう。

シュテルンが「ハンニバルによるカンネー包囲戦の再現」<sup>(33)</sup>と揚言した大規模な両翼包囲作戦を成功させるには、日本軍を現在位置にひきとめ、「生かさず殺さず」の状態であやしておく必要があった。

情報工作の分野でソ連が仕掛けた布石は他にもある。ひとつは八月攻勢の切迫を、ハルビン特務機関に潜入させていた工作員を通じ、日本側の情報機関にキャッチさせる手法だ。

「関東軍機密作戦日誌」には「七月中旬軍参謀部第二課は敵が八月中旬を期し攻勢を執るの企図あり此の情報に關連し、(1)八月十四日を期して行われるべし、(2)敵の現地指揮官は準備未完了を理由とし之が延期を申し出であり、(3)補給困難の爲敵は悲鳴を挙げつつあり」という記事がある。

このうち(1)についてはその後、八月上旬、五〇日、中旬などまちまちの情報 flowed が流れたが、(2)(3)は大した規模にはなるまいと緊張感をゆるめる作用を果した。不可解なのは関東軍司令部が攻勢はノモンハン正面ではなく他正面、とくに東部満州に向けられるのではないかと疑心を深めたことである。

引金になったのはチチハルに近いフルキ鉄橋が、七月十六日の未明に爆撃された事件で、わずか一機が数発を投じただけで鉄橋に被害はなかったが、関東軍は過敏に反応する<sup>(34)</sup>。

東部国境の動きから「蘇極東全軍は動員せられたり」<sup>(35)</sup>と判断した関東軍司令部は全満に戦時防空令を発動したばかりでなく、東満の第二、第四師団等を応急派兵により国境地区へ推進した。

植田関東軍司令官は在チチハルの第七師団主力をハイラルまで前進させたらどうかと提言したり、秦ハルビン特務機関長や大本営第一部からも同様の提言が届いていたが、他正面の危機感に駆られたのか、関東軍作戦課はことごとく握りつぶしてしまう。

そして既設陣地を守りつづける第二十三師団に対しては、死傷者の穴埋めに全満の各部隊から抜いた四千人余の補充兵を送り、ハイラル要塞の守備についていた第八国境守備隊（八国）から歩兵二個大隊基幹の長谷部支隊（約一五〇〇人）を派遣する程度ですませた。一個師団の担任正面は七〜八kmというのが兵術常識だったのに、北はフイ高地からバル西高地を経て南はノロ高地に至る三七kmの薄い一線を守らせ、拠拠間は「象も通り抜ける」ほど隙間だらけのまま八月二十日を迎えることになる。

関東軍作戦課がノモンハン地区の防御固めに不熱心だったのは、砲兵戦が期待外れに終わってもこりることなく、今一度攻勢をとってハルハ右岸の敵を一掃したいという意欲を捨てなかつたからでもある。

なかでも服部参謀は九月上旬にハルハ左岸へ渡って、ジューコフ司令部のあるハマルダバを占領したまま越冬しようとする奇策を提案している。さすがに厳冬期のきびしさを知る辻参謀の反対で流れたが、攻勢を右岸にとどめ敵を一掃したのち一部で右岸を守り、主力は後方で越冬させることを骨子とする「ノモンハン事件処理要綱」（8月12日付）を定め、第二十三師団長にも下達した<sup>(36)</sup>。予兆めいた情報が空振りに終わったせいもあるが、八月攻勢の有無はいつしか彼らの念頭から消えかけていたのかもしれない。

折から、関東軍の注意力をそらせるもうひとつの事態が起きた。中間指揮機構としての第六軍の新設である。

## 第六軍の新設

既設の中間司令部としては、東満州担当の第三軍と第五軍、北満州担当の第四軍があり、大本営はかねてからハイラル、ノモンハンなどの北西方面を受けもつ第六軍の新設を予定していた。それを早めて八月四日付の大陸命で編成

した理由について稲田作戦課長は、戦場の作戦指揮を新設軍に委せ、関東軍には大局的視野に立った事件の早期收拾を望んだからだと説明しているが、それは期待外れに終わった。理由はいくつもある。

第一は、新設軍の幹部に適材をそろえなかつたことであろう。軍司令官に任命された荻洲立兵中將は前職が徐州会戦で勇名をはせた第十三師団長で、「精力的、積極的に一部の人々には名誉欲の強い人物」<sup>(37)</sup>（クックス）と評されていた。歩兵から航空へ転科し朝鮮の飛行団長から転じてきた参謀長の藤本鉄熊少将や新任の参謀（五人）のうち、関東軍に勤務して満州に土地勘を持つ者は、高級参謀の浜田寿栄雄大佐<sup>すえお</sup>だけであつた。新京の関東軍司令部には二十数人の参謀が勤務していたのに一人として横すべりした者がいなかったのは、戦闘継続中の人事としては理解しにくい。

第二は、第六軍に編入された部隊が、戦力が半減している第二十三師団と第八国境守備隊、ハイラル第一、同第二陸軍病院だけという貧弱な陣容だつたことである。しかも八国から抽出した長谷部支隊は、すでに第二十三師団へ配属され、八月四日からノロ高地の守備についていた。つまり追加兵力はゼロも同然だつたのである。

荻洲軍司令官らは八月十二日、初度巡視に赴き小松原師団長や小林歩兵団長らと会談したさい、將軍廟へ戦闘司令部を出そうかと検討した。しかし司令部直属の通信班や護衛兵さえいないので、指揮連絡に不便すぎると判断して、翌日には司令部の位置と決めたハイラルへ戻つてしまう。

その後も新設早々の繁忙さにまぎれ、参謀さえ派遣しないまま一週間後にソ軍の大攻勢を迎えることになり、ジューコフから日本軍の幹部は休暇をとつて二〇〇キロ後方のハイラルで遊んでいた、とからかわれる。

増援兵力や装備などの「お土産」を持参しない上級司令部が、下級部隊からとかく冷眼視される現象は珍しくない。荻洲の初度巡視に立ち会つた小林歩兵団長が、日記に「休憩所にて酒を催促され、ちよつと面くらえり」<sup>(38)</sup>とさりげな

く書いたエピソードからも、第一線指揮官たちが新軍司令官に抱いた微妙な異和感が見てとれる。第六軍もせめて在チチハルの第七師団主力を投入してくれと関東軍へ要請するが、それが実現するのは八月下旬になってからだった。

第三に、関東軍参謀たちは「破れそうな茅屋を、雨漏りのままで譲る」<sup>(39)</sup>ことに後めたい思いを抱きながらも、口出しは遠慮するという建前論で、満足な引きつぎもせず厄介な仕事は新設軍に丸投げしてしまう。うるさいほど現地を往来していた辻参謀も、ぱったり姿を見せなくなった。似たような断絶は第二十三師団や第一線部隊との間にも起き、結果的に五万余の大兵力、九百両に近い戦車・装甲車を結集した敵の大攻勢を当日朝まで気づかぬ失態を招くが、予兆が皆無だったわけではない。

直前の数日、戦場一帯は「嵐の前の静けさ」を思わせた。長谷部支隊の「今日の戦線は久しぶりに静か」（十八日）「今日も戦場は静かだ」（十九日）、九〇野砲部隊の「銃声もなく実に平穏な日」（十九日）式ののんびりした記録が目につく。

そのなかでノロ高地東南方を守っていた歩71は、ハルハ河南方を北進する敵機甲部隊の動きに気づき「わが左翼を包囲する企図確実」<sup>(40)</sup>（十八日）と見破っているが、師団司令部が反応した気配はない。

航空偵察も悪天候のため不活発で八月十日以後はほとんど飛んだ記録がないが、天候が回復した十九日に、飛行11戦隊の滝山中尉編隊がタムスクー川又間の道路沿いに約七〇〇両の車両部隊を発見した。飛行15戦隊の軍偵も十九日午後、ハルハ河南渡付近とファイ高地周辺に敵大部隊を発見、大泉大尉はハサミ状の包囲隊形が作られつつあると報告したが、やはり飛行集団からの警報を、第六軍や第二十三師団が深刻に受けとめたようすはなさそうだ。<sup>(41)</sup>

ついでに八月二十日の大攻勢に対する日本側の最初の代表的な反応を、いくつか列挙しておきたい。

- (1) 歩71戦闘詳報「本早期以來敵は全線にわたり攻勢に轉移せり」(20日)
- (2) 独立野砲1連隊「本日は敵の総攻撃ならん」<sup>(42)</sup>(20日)
- (3) 小松原日記「敵軍全線攻勢開始……工事を中止し……爾後の攻勢を準備す」(20日)
- (4) 浜田第六軍参謀「いよいよソの反攻と判断したが、第七師団の派遣を要請するの三日ぐらいかかった」<sup>(43)</sup>
- (5) 関東軍機密作戦日誌「遺憾ながら(事前に)何等の情報を得ることなく……我の最も好期に敵が攻勢に転じたるものにして此の機会に於て敵を捕捉し得るものと信じたり」
- (6) 西浦進中佐(陸軍省軍事課)「ソの大攻勢を知り第二課へ飛んでいくと、これは却つて我方からの逆包围の好機を与えるものだ」と楽観していた……翌日の朝、敵の大攻勢で総崩れと」<sup>(44)</sup>

傍桌部分を見ていくと、小松原師団長は七月末から八月上旬にかけて、関東軍から命じられた攻勢移転構想が棚上げされたあと、まだ未練を残していたこと、関東軍と大本營の作戦参謀たちはいずれもソ蒙軍の戦力を軽視し、反撃して逆包围する好機だと楽観していたようすがわかる。その夢は数日もしないうちに打ち碎かれるのだが、ここで目を転じてソ連側から見た大攻勢のお膳立てぶりを眺めてみたい。

### 八月攻勢の発動

八月攻勢を「ジューコフの傑作」(Zhukov's Master Piece)と形容したクックス博士は、著書『ノモンハン—草原の日ソ戦』で、感慨をこめて「日本とソ連の資料は、次の二卓では珍らしくも一致している。ひとつは、一九三九年八

月二十日（日曜）が快晴であったこと、もうひとつは、ソ連軍が破竹の勢いで、戦端を開いたことであつた<sup>(45)</sup>と書きだしたあと、「ジューコフの作戦運用は……周到な準備、詳細にわたる偵察、指令系統の明確化、優秀な通信連絡、そして兵站上の困難な問題を事前に片づけておいたことだつた<sup>(46)</sup>」と、最大級の讃辞を呈している。

勝敗は戦端を開く前から定まっていたとの結論に筆者も共感するが、日ソ両軍の比較できわだつのは兵站問題の格差だろう。日本側の利点は鉄道端末から戦場までの距離が短かいのに対し、弱点は国力差ばかりでなく大本営との不和が影響して、関東軍が手持ちの兵力、資材の範囲内で賄おうとこだわったことであつた。

それに対し、ソ連軍は中央の積極的支持を受け、三か月近くにわたり一貫して兵力の集中と補給物資の蓄積を進めることができたが、弱点もあつた。骨幹となる補給ルートは、シベリア鉄道の端末であるボルジア―ソロヴィヨフスク（ソ蒙国境）からバイントウメン、タムスクを経てハルハ河に至る約七〇〇kmの未舗装道路で、別にキャプタから首都ウランバートルを経てタムスクに至るルートも補助的に利用された。

補給業務の過半はチタに司令部を置くバイカル軍管区が引き受けたが、責任者のシュテルンは「はかりしれぬほどの困難な仕事だつた<sup>(47)</sup>」と強調し、その理由を東部モンゴルの荒涼地には羊肉を除き、現地補給のできる物資が皆無だつたからだと言明している。

攻勢のため必要な砲弾、爆弾、燃料など約四万トンを輸送するためトラック約五千両（コンテナ車、タンク車をふくむ）が必要なのに当初は二六〇〇両の手持ちしかなく、途中から一五〇〇両を追加してもらつたが、なお不足で狙撃師団の一部は数百キロを徒歩行軍させざるをえなかつた<sup>(48)</sup>。

これを日本側の補給力と比べてみよう。自動車第一連隊の戦闘詳報などによると、トラックの動員数は六月段階で

六〇〇両だったが、七月には一〇〇〇両（可動七五〇）にふえた。八月に入ると、満鉄から三〇〇両などが加わって二〇〇〇両となり、日量一五〇〇トンの輸送力を確保したという。<sup>49</sup> 八月一日頃のソ軍の補給日量一九五〇トンと比べて大差はない。

日本側はハイラル（將軍廟間）を二日で往復したのに対し、ソ連側のドライバーは無灯火のトラックで七〇〇キロを五日かけて往復したので、条件ははるかにハードで、補給にからむ苦情や催促は日本側にも傍受されている。ともあれソ軍は少なからぬ障害を克服して攻勢開始までに、必要とする兵力と物資を何とか確保したと言えそうだ。

こうして総兵力は七月末いらい第6戦車旅団、第57狙撃師団、第二一二空挺旅団など新鋭の約一万八千人を加えて三個狙撃師団を基幹に五万二千人、火炮四八七門、戦車・装甲車八二二両に達したが（表3参照）、日本軍にない戦車・装甲車では圧倒的に優勢とはいえず、攻者三倍原則を考慮すると、約五万と推定（実際は二万前後）した日本の歩兵戦力に対して十分とは思えなかった。<sup>50</sup> それを意識したジューコフとシュテルンは、急襲と両翼包囲の達成をめざし慎重な準備計画を練る。

すべての事前準備、とくに発動日は厳秘とされた。ソ軍は受身で防御陣地の強化に忙しいと思わせる、さまざまな偽装工作を考案した。七月末から準備した最終的な作戦計画書は八月十七日夜に完成、「八月二十日の朝、第一集團軍部隊は、ハルハ河と国境線との間のモンゴル領土にて日満軍を包囲し、完全に殲滅させる目的で決戦に移る」<sup>51</sup>との指令が各級指揮官へ下達された。

ここで言う国境線とはソ蒙が主張してきたノモンハン・ブルド・オボ西側を南北に走る線を指す。ウオロシロフ国防相は、それを進出の限界線とするよう厳命してきたため、最終段階で作戦計画を修正したとされる。<sup>52</sup>

表3 ソ蒙軍兵力の一覧

(1939年8月20日現在)

	部隊名	兵員	火砲	戦車	装甲車	対戦車砲
北部集団 (シェフニコフ大佐)	モンゴル6KD (15, 17) (212空挺旅) (9装甲旅) (6戦車旅第4大隊) 狙601連隊 (82D)		8		18	6
	7装甲旅	1,624	10	—	83	—
	11戦車旅 (2大隊)	3,776	11	200(122)	22	—
	87ATK大隊	273				18
	支援重砲		60			
	36D (24, 149)	6,103	48	—	36	20
	82D (602, 603)	10,724	65	17	—	33
中部集団 (ベトロフ大佐)	5狙撃旅団	2,534	8	—	43	22
	支援重砲		96			
	57D (293, 127, 80)	11,816	44	14	15	33
	11戦車旅 (1大隊)					
南部集団 (ポタポフ大佐)	6戦車旅	2,622	4	202(78)	26	6
	8装甲旅 (狙1連隊)	1,531		5	78	
	37ATK大隊	300				18
	モンゴル8KD (22, 23)		8		18	6
	支援重砲		72			
	予備	212空挺旅	899	—	—	—
	6戦車旅第4大隊					6
	9装甲旅	1,809	8	—	82(12)	4
	185砲連隊	1,731	33(重砲)	—	—	—
	狙1連隊 (152D)	2,838	12	—	—	6
	計 (その他共)	51,950	220	438	385	180

出所：コロミーエツ p.101、ジュコフ報告書 p.641

D=師団 (カッコは狙撃連隊名)、KD=騎兵師団、ATK=対戦車砲

(1)モンゴル6KDと8KDの兵員は計2,260人

(2)戦車、装甲車のカッコ内は損失数

(3)シュテルン報告書によれば、総兵力は騎兵20中隊、歩兵37大隊、砲兵127中隊

(4)部隊名をカッコで示したものは8月21日以後の参戦を示す

二日前には無線封止、前日は砲撃休止が命じられ、ハルハ河を渡り発進点に向けて各部隊が最終移動したのは前日夜、兵士たちが発動時刻を知らされたのは三時間前という念の入れ方だった。天候も幸運を運んだ。二十日朝はかなり濃い朝霧で部隊の初動段階を隠し、まもなく快晴となったからである。

南北55kmに及ぶ進攻正面は、北部、中部（ホルステン川を挟む両側）、南部の三集団に分割された。主要部隊名と兵力・装備は表3に示した。概数で1万、2万、2万という配分だが、中部が砲撃主体の引きつけ役を果し、最左翼と最右翼のモンゴル騎兵師団が対する満州国軍を拘束している間に、北翼と南翼に配した機甲部隊を最外側から迂回させ、ノモンハン付近で接続して包囲環を形成するのが第一段階と予定された。

ついで大包囲環の中に封じこめた日本軍主力を、樅貞ごとに包囲し歩戦砲のチームで徹底的に潰していくのが第二段階となる。計画どおりに進展すれば「カンネーの再来」も夢ではない。

さて攻勢発動（八月二十日）の情景は、シュテルンやスムシュケビッチらとともにハマルダバの司令部展望台から、戦場を見守っていたジューコフ自身の次のような回想から借用しよう。

五時四五分、わが軍砲兵は敵軍の高射砲陣地に対し不意打ちの砲撃を開始し、空軍の爆撃目標に対し発煙弾を射ちこみ、待機する爆撃機一五〇、戦闘機約一〇〇機が襲いかかった。

八時一五分、すべての火砲が一斉に砲門を開く。八時四五分、所定の暗号通信により一五分後の総攻撃開始を伝え、赤色の信号弾の合図とともに九時きっかりに全地上部隊の前進が開始された……敵は心身ともに圧倒され、はじめの一時間半、砲兵は応射すらできなかつた。総攻撃は的確に作戦・戦闘計画に従って遂行された。<sup>53</sup>

ジューコフが誇るように各部隊の初動は予定どおり整然と進んだかに見えるが、多少の手違いが生じるのは避けられない。もつとも進撃が速かったのは南部集団だった。増水で第6戦車旅団はハルハ渡河が一日おくれるが、迂回任務を負った第8装甲旅団はその日の夜にはノモンハン地区まで到達した。またモンゴル第8騎兵師団は満軍を撃破したが、そのさい石蘭支隊は反乱を起こし、指導役の日系軍官を殺害して二五〇人がモ軍に投降した。<sup>54</sup>

拘束役の中部集団は、バルシャガル高地とノロ高地の日本軍陣地に迫り力攻めは控えたが、北部集団では手順に狂いが生じた。モンゴル第6騎兵師団はホンジンガンガとシャリントロゴイに布陣していた満軍を一撃で潰走させたが、迂回役の第7装甲旅は後述のようにフイ高地攻めで日本軍の猛抵抗に会い動けなくなってしまう。

### 猛攻と抵抗のはざままで

ここで不意を打たれた日本軍の対応ぶりを見ておきたいが、敵攻勢の重点がどこに向けられているか最初は見きわめがつかなかったようである。最後までと言い換えてよいのかもしれない。二十一日の段階で第二十三師団は北翼のフイ高地かと判断しているが、同じ日に第六軍は関東軍へ「重点はホルステン南方地区か」と報告した。二十二日には「ソ軍の攻勢は各正面に兵力をバラまき一見重点なし」と連絡している。

本来なら重点を見定めないことには、敵の攻勢をいかに食いとめるか策の立てようもないはずだが、そのころ軍と師団幹部の関心は以前から念頭にあった攻勢計画の発動に集中していたようだ。それでもソ側に先手をとられた以上は見合せるのが常道だろうが、なぜか南部集団をさらに外側から包囲する逆攻勢の幻想にとりつかれてしまう。

小松原は早くも二十日夕方に「攻勢移転準備」の命令を発しているが、攻勢方向について第六軍との調整に手間ど

り、二十三日になって七五二高地東西の線から発進して七八〇高地東西の線へ進出したあと、ハルハ河まで追撃する第六軍案におちつく。さすがに藤本第六軍参謀長は「第二十三師団長は其の実行を痛く渋りあり。かくの如きを駆りて攻勢に出づるも其の成功を期待すること殆ど困難なり」として、攻勢の中止意見を軍司令官に具申したが採用されなかった。

シーシキンが「紙上計画」と酷評するこの攻勢計画は「ソ軍を深くわが左翼に誘致するとともに、攻勢部隊はあらかじめ十分準備を整え、歩砲の火力を発揮しつつ一挙敵の側背に向かって攻撃前進し捕捉殲滅する」と意気ごみだけは壮だが、準備も兵力も不足のままに踏み切ってしまった<sup>55</sup>。

投入した手つかずの新鋭兵力は歩28、四ツ谷大隊などの三個大隊にすぎず、すでに防御戦闘で忙しい守備陣地からむりに引き抜いてきた諸部隊を合し、予定した歩兵九個大隊のうち実際に二十四日朝の総攻撃に間にあったのは歩72と歩28の五個大隊にすぎず、砲兵団（一部）の展開もおくれてしまう。そして敵情を把握せず砲兵の援護も欠いたままに発動した昼間の白兵突撃は、その二日前に進出して制高卓の七八〇高地に堅固な防御陣地を急造し待ちかまえていた狙撃80連隊と機甲・砲兵の猛反撃に阻まれ、あっけなく敗退してしまう。

突撃に同行していた辻参謀は、小林歩兵団長、酒井歩72連隊長が重傷を負う状況を見て独断で師団命令を発し、残兵を後退させている。翌日も攻撃を再興したが、結果は同様で歩72、歩28は五割以上の死傷者を出した<sup>56</sup>。

扇広参謀が「ノモンハンで最も拙劣な作戦<sup>57</sup>」と酷評したこの攻勢移転の失敗は、苦戦しながら頑強な抵抗をつづけていた防御拠点の急速崩壊をもたらず誘因となる。とくに砲兵団をふくむ師団主力が布陣していたホルステン北側のバルシャガル地区から歩26と歩72が攻勢移転に抜かれたあと、守備兵力は歩64だけとなり、攻防のバランスが崩れた。

たとえば西側は歩64が狙撃第36師団と対峙していたのだが、二十四日にファイ高地が落ちると、北部集団が南下し、二十七日にノロ高地の長谷部支隊が敗退すると、狙撃第82師団がホルステン川を渡って北進し、東方からも第9装甲旅団が迫り、四周は完全に包囲される。逃げ道のない日本軍は、拠拠ごと全滅するしかなかった。自衛力を持たぬ砲兵団は、「砲兵は必ず是（火砲）と死生榮辱を共にし」（砲兵操典十一項）を守り、大多数が砲側で砲と運命を共にしている。

ここでは数多い戦例のうちファイ高地、ノロ高地、バル西高地の攻防戦を日ソ双方の記録で対照してみる。

### ファイ高地

ファイ高地（ロシア名はバーレツ）の呼び名は、標高の七二一<sup>ファイ</sup>mに由来する。高地と言っても周辺は波状の砂丘地帯で比高は五〇m以下なので、遠望してもさして目立ぬ砂丘の一つにすぎない。

七月三日のハルハ左岸への渡河攻撃部隊はファイ高地から出撃したが、その後主戦場がホルステン川を挟む川又地区へ移ったため、第二十三師団の最北翼に孤立した拠拠となった。五月の戦闘で壊滅した師団捜索隊は、戦死した東中佐の後任に井置栄一騎兵中佐を迎え、再建を進めていたが、七月十日に井置支隊としてファイ高地の守備についた。

当初は固有の二個中隊（約二五〇名）と歩26の一個中隊（九〇名）だけであったが、その後、歩25、26、27、砲13、工23などから各一個中隊が配属された。八月二十日現在の兵力は兵員八〇九名（実働は七五九）、野砲3門、山砲4門、速射砲1門、装甲車1両と、合計しても一個大隊の規模にすぎなかった。しかし一か月余の平穩期を利用して工兵の手で半地下式の築城工事が加えられ、幅一五〇〇mの円形陣地が完成していた。比較すれば日本軍の陣地ではもっと

も頑丈に作られていたといえよう。

北部集団の猛攻が始まると、不安を覚えた師団は八月二十一日、七五二高地にいた歩26連隊長へ七三九高地を占領してファイ救援の態勢を取るよう命じた。ところが攻勢移転に参加するため歩26はせっかく確保した七三九も捨て、ノモンハン方面へ転進させられた。ファイ高地は「現陣地を固守すべし」と二十日夜に師団命令を受けたまま放置され、二十三日にはすべての砲と無線機まで破壊されてしまった。

戦闘詳報や生存者の記録から、五日間にわたる攻防戦の一端を抜きだしてみよう。<sup>(58)</sup>

「(約百門の敵砲弾は)測定に依れば一秒間に三発、一平方米に一発の割合、突入してきた敵戦車群を直接照準射撃と火炎びんで擱座炎上させた」(20日)

「両側面の満軍が退却し、ファイ高地は四周を包囲され孤立。敵の十字砲火は前日に倍し、一分間百数十発をかぞえた。突入してきた敵戦車と歩兵を撃退……夜に歩26が弾薬を補給してくれた」(21日)

「敵砲撃は一分間に二百数十発、壕は次々に埋没、そのなかで抜刀突撃を敢行、敵戦車を撃破、夜おそく副官が脱出して師団へ連絡」(22日)

「兵は不眠不休、水、糧食のないため顔色は土色に……支隊長は二三〇〇に夜襲を命じ出撃した工兵は帰来せず(そのまま脱出)」(23日)

「随所で白兵戦、最後の砲一門も破壊され、残る武器は手榴弾と銃剣のみ」(24日)

井置支隊長は二十四日の一一〇〇頃、「明日の砲撃を待ちて無為に全滅せんよりはノモンハンに至り、再起したい

と中隊長たちの意見が一致」したのを察し「小官一人で責任を負う」<sup>59</sup>決心を固め、同日深夜の戦線離脱を命令する。一列縦隊で奇跡的に包圍網を抜け出た井置隊の二六〇人余は二十五日朝、満軍に収容され軍司令部からオボネー山の守備につくよう命じられた。その間に無断撤退のかどで取調べが始まり、全責任を負った井置中佐は停戦直後の九月十七日にピストルで自決した。

次に同じ戦鬪をソ蒙側の視卓から観察する。

最左翼を担当したモンゴル騎兵第6師団は、ホンジンガンガ周辺とシャリントロゴイを守っていた満州国軍の興安騎兵部隊を奇襲し「国境線」まで退散させた。陣地に突入すると「武器が散乱し、鍋の中ではまだ料理が煮たっていた」<sup>60</sup>と、ダンダル師団長は回想する。

ファイ高地の正面に向ったのは第7装甲旅と狙撃601連隊だったが、日本の兵力を二個中隊程度と下算して安易に攻めかかり、手ひどい反撃を受け、連隊長のスターク少佐が戦死した。「見こみ違い」を重視したジュコフは、手許の予備兵力から第9装甲旅団と第6戦車旅団の第4大隊を抜き、アレクセンコ大佐が指揮する特別兵団を編成、ファイを迂回して「国境線」沿いにノモンハン・ブルド・オボへ向け突進させた。<sup>61</sup>

ノヴィコフはそれを「非常に大胆な決心であった」と評すが、アレクセンコ兵団は二十二日、ウズル水付近の日本軍補給基地を襲撃、日本軍の補給源を断ち、ついでに守備隊と野戦病院の負傷兵を蹂躪した。そして二十四日に南部集団の第8装甲旅と握手したあと、バル高地で孤立していた砲兵団陣地の攻撃に向う。

しかしファイ高地攻囲部隊は日本軍の猛抵抗に手こずり、ジュコフは76ミリ、122ミリ、152ミリ砲の各一大隊とボグ

ダーノフ参謀長を増派し、さらに最後の予備兵力である第212空挺旅団を追加投入した。二十三日夜に占領したという報告が届くが、実際には日本軍陣地内の掃討戦は二十四日までつづき、日本兵の死体約六〇〇体を引きだす。<sup>62</sup>

ソ連戦史は一樣に井置支隊の健闘を評価している。たとえばソ連の第二次大戦史は「(ファイを) 一気に攻略しようとする試みはついに成功するにいたらなかった」と記すが、当時の第六軍には過早の撤退で師団主力の崩壊を早めたという不満が残ったようだ。

## ノロ高地

ホルステン南側の日本軍は西北から東南へ長谷部支隊主力、歩28の梶川大隊、歩71主力の順に布陣し、後背部に位置する砲兵団(一部)が支援していた(図2参照)。中心的拠点は長谷部支隊が守るノロ(七四二)高地だが、兵力は配属の歩28梶川大隊を加えても一五〇〇人前後にすぎない。

それに対し攻めかかったソ軍は狙撃82師団、同57師団など圧倒的な大兵力で、支隊と歩71はじりじりと押されて次々に拠点を失っていく。とくに反転攻勢に兵力を抜かれたこともあって、梶川大隊と歩71の境界地域は手薄となり、八月二十二日には七四七、七四四高地を放棄、二十三日には三角山が全滅、二十五日には全滅寸前の梶川大隊は七五四高地を捨てノロ高地へ後退して長谷部本隊と合流した。

シーシキンはソ軍の攻撃ぶりについて「あらゆる口径の砲が至近距離から直接照準によって敵の火点を射撃した。火焰放射戦車は掩体や地下退避壕から現れた兵士を焼きつくし、歩兵は手榴弾と銃剣によって殲滅を完成した」と書いている。<sup>63</sup>

二十六日には長谷部支隊は死傷率が七割を超えた。弾薬、食糧が尽き、無電機も破壊されて鳩通信に頼るしかなかったが、師団長からは死守せよとの命令が届く。

しかし長谷部支隊長は玉砕の道を取らず同日夜、北東三〜四kmの七四九高地付近へ向う後退命令を出した。ジュークコフは82師団へ二十七日午後の総攻撃を下令したので、半日違いでかわしたことになるが、撤退は難澁をきわめる。すでに先まわりしたソ軍の歩兵・戦車の間隙を縫う形で各隊がバラバラになってモホレヒ湖をめざす脱出行となる。名目は「自主撤退」だったが、実態は「早い者勝ち」（扇広）になってしまう。

ソ連戦史はホルステン川の周辺で、脱出中の日本軍を二十七日の夜明、一一〇〇頃、一七〇〇の三度にわたり撃滅し、「敵一個大隊のうち無事に残ったのはわずか数人<sup>64</sup>」と記録している。長谷部支隊と師団から撤退命令を受けた歩71の一部と見てよい。のちに長谷部大佐は「独断守地撤退」の責任を追究され、自決に追いこまれた。こうしてホルステン南岸の日本軍はすべて姿を消し、残る拠点は北岸のバルシャガル高地だけとなる。

### レミゾフ高地

レミゾフ高地は七月八日この地の戦闘で戦死したレミゾフ少佐を記念して命名されたもので、バルシャガル高地帯の西端に近く、日本軍は七三三高地またはバル西高地と呼んでいた。歩72が転用されたあとは歩64のⅠ（赤井）大隊が南端部を、Ⅱ（津久井）大隊が七三三を、Ⅲ（金井塚）大隊が北端のキルデグイ水陣地を守り、Ⅱ大とⅢ大の中間にある七三一に歩26のⅠ（生田）大隊が入っていた。

後背には砲13、野重1、野重7、<sup>ムリリン</sup>穆稜重砲連隊など砲兵団の主力が歩64を支援する形に位置していたが、七五二高



地の歩28が転進したあと、砲兵団の北側はガラ空きになってしまい、二十四日以降はフイ方面から南下してきた狙601と第7、第9装甲旅、東側と南側は、ホルステン川を渡って浸透してきた南部集団の狙127、第6戦車旅によって、四方から包囲されてしまう。

砲兵には至近まで迫った敵歩兵・戦車と戦う手段はない。各砲兵連隊は二十八日までにほぼ全滅した。勝ちほこつたソ連軍の宣伝放送を、野重7の丸山正巳は前年に亡命した新劇女優の岡田嘉子の声らしく次のような文言だったと回想している。<sup>65</sup>

「日本の兵隊さん、毎日お暑いところほんとうに御苦労さまですね。もう幾日も幾日も何も召し上つていらっしやらないので、さぞかしお腹も空いたことでしょう。皆さんが投降してきませんので、止むなく完全に包囲いたしました。が今からでもおそくありません……」もちろん投降する兵は一人もなく、三人の連隊長は戦死したが、脱出生還した野重7連隊長の男爵鷹司大佐は停職・華族の礼遇停止処分を受けたのち、予備役へ編入された。

それでも各砲兵連隊には少数の生還者があり、最期の戦闘状況もほぼ判明しているが、二十六日に全滅した穆稜の場合は染谷連隊長ら幹部の死を見届けた者もなく、詳細は不明である。<sup>66</sup>ソ連戦史でも情報は乏しいが、装備していた15センチ加農砲6門のうち捕獲した5門を並べた写真が公表されており、シュテルン報告書は、うち1門が旅順重砲兵連隊所属の砲だったことに触れ、「日露戦争の屈辱を晴らしたという声もあつた」と注記している。

一方、歩64の戦線では二十五日に生田大隊が壊滅したあと、攻防の焦点はレミゾフ高地に移った。山県連隊長は小松原師団長が一千余人の手兵をひきいて「救出」に向うと連絡を受け待っていたが、見込なしと判断して、二十九日〇二〇〇に大隊ごとにノモンハンへ向け撤退するよう命令を下達する。<sup>67</sup>

I大隊とIII大隊は何とか脱出に成功するが、ホルステン川沿いのルートをとった山県連隊長と砲13の伊勢連隊長は夜明頃にソ軍の重囲下で自決した。生還すれば二人は無断撤退の責任を問われたかもしれない。

レミゾフ高地は日本軍最後の拠点だっただけに、ジュニコフ将軍は特別な配慮を示し、二十八日夕方に歴戦の名指揮官とされていた狙24連隊長のフェディンスキー少佐（のち大将）へ二四〇〇までに高地頂上を奪取するよう命じ、狙24は火焰放射戦車に支援されつつ突進した。

ノヴィコフはその光景を「高地ではまるで噴火が始まったようだ。戦車の吐き出す長い炎の舌は、敵をあらゆる壕から焼払い、日本軍に恐怖とパニックをひきおこした」「フェディンスキー少佐は途中で負傷してブルジャク少佐が代り、若い指揮官のB・キーリンと偵察兵B・スミルノフが頂上に赤旗を立てた」と記述している。

対応する日本側の記録は見つかっていない。高地の稜線を守っていたのは歩64の第II大隊（長は津久井明雄少佐）だが、その最期を伝えるのは、南に隣りあっていた第I大隊戦闘詳報の「II大隊は本日の戦闘に於て殆んど全滅、（東側の山県）支隊本部も包围せられ」（28日）という記事だけである。

七三三の占領を確認したジュニコフは、モスクワへ向け「当地時間の二二三〇、敵の最後の拠点レミゾフ高地が一掃された。国境はここに完全に回復した」と報告した。

日本軍の最後をしめくくるかのように登場したのは、かの辻政信参謀である。八月三十日第六軍司令部へかけつけた辻は、荻洲軍司令官に「辻君！僕は小松原が死んでくれることを希望しているがどうかねえ君ッ」と声をかけられる。憤然とした辻は「小松原閣下としては数千の部下を失った罪を死を以て償おうとしておられる……それだけに軍

司令官としては何とでもして、この師団長を救い出すべきではないですか<sup>(7)</sup>とどなりあげた。

そのあと「貴官は万難を排し突破帰還すべし」との軍命令が発せられ、独断撤退した山県大佐らと数時間の差で行きがちった小松原は、七三三高地の近傍で玉碎戦闘を覚悟していたが、軍命令により半数に減った残兵とともにソ軍の重囲を突破、三十一日朝に帰還した。

ソ蒙軍側の戦史を検分したかぎり、彼らは小松原自身が直率した部隊の潜入と脱出行に気づかず、残敵掃討の一部としか認識していなかったようである。レミゾフ高地の占領（二十八日深夜）をもって作戦は終了したとの思いこみもあつたろう。もし気づいていれば小松原を倒し、有終の美を飾ろうとしたにちがいない。

ともあれ八月末をもって、ノモンハンの地上戦闘は実質的に終わったと言ってよさそうだ。

注

- (1) 前掲『関東軍へ1』三四四ページ
- (2) 前掲「関東軍機密作戦日誌」七八ページ
- (3) 前掲『昭和史の天皇27』の高山談（二六二―六四ページ）
- (4) ボリス・スラヴィンスキー『日ソ戦争への道』（共同通信社、一九九九）一七三ページ
- (5) 前掲ノヴィコフ（ソ連側資料からみたノモンハン事件）六四ページ
- (6) N・ルミヤンツェフ『ハルヒンゴルの英雄たち』（モスクワ、一九八九）の平井友義訳稿
- (7) 丸山正巳『ノモンハン事件回顧録』（非売品、一九九九）六九ページ
- (8) 前掲「関東軍機密作戦日誌」別紙七四、なお、関東軍の返電は記載されていない。
- (9) 六月下旬大本営作戦課の有末中佐が新京へ来て、在中國第五師団を「関東軍に増加し得る情況なるが如何との質問ありし

- が寺田参謀以下其の必要な旨答えたり」と「関東軍機密作戦日誌」は記している（九二ページ）。
- (10) 畑勇三郎「ノモンハン事件の砲兵戦」（一九六五年版）五三ページ
  - (11) 飛行第15戦隊の大泉製正中尉談（『昭和史の天皇28』一五四ページ）
  - (12) 岩田正孝大尉（野重第3旅団司令部）談（『昭和史の天皇28』二二二ページ）
  - (13) 牛島康允「ノモンハン全戦史」（自然と科学社、一九八八）二四五ページ
  - (14) 戦史叢書『支那事変陸軍作戦（2）』（一九七六）三五五ページ
  - (15) 前掲畑勇三郎、五三ページ
  - (16) 前掲扇『私評ノモンハン』一九〇ページ
  - (17) 畑勇三郎「ノモンハン事件の砲兵戦」（一九六〇年版、防研所蔵）四七ページ
  - (18) 町田三千男少尉の証言（『昭和史の天皇28』一八八ページ）
  - (19) 前掲畑勇三郎（一九六五年版）八二ページ
  - (20) 三嶋義一郎談（『昭和史の天皇28』一六三ページ）
  - (21) 正井義人「ノモンハン事件に於ける砲兵」（一九五六、防研所蔵）
  - (22) 前掲「ジュウコフ最終報告書」六四三ページに、砲種別の月間射耗数が掲記されている。七月の重砲（107ミリ以上）射耗は三万一七〇五発で7月23〜25日分は不明だが、約半分とみなせば約一万五千発になる。
  - (23) 同右、六四四ページ
  - (24) 大泉製正中尉（飛行第15戦隊中隊長）の証言（『昭和史の天皇28』一五五ページ）
  - (25) 七月二十四日発の関作命の原文は見当たらないが、それを受けて発令された二十三師団の作命甲は『昭和史の天皇28』二六三―六四ページに掲載されている。なお前掲『関東軍（1）』五八六ページを参照
  - (26) 小林恒一「ノモンハン出征記」（防研所蔵）
  - (27) 前掲『昭和史の天皇28』の島貫回想（二六六ページ）。なお関作命は、二十四日の関東軍作戦会議で決定したとも島貫は述

べている。）

- (28) 8月12日在モスクワ土居武官発関東軍参謀長宛電（前掲「大本営研究班抜粹」）
- (29) 7月20日、大本営の会議における磯谷関東軍参謀長の陳述（「関東軍機密作戦日誌」一八〇ページ。）
- (30) 前掲牛島、二六七ページ
- (31) 鈴木平五郎手記（『ノモンハン』第5号）
- (32) 谷口勝久『ノモンハン高地独断撤退』（旺史社、一九八六）三二一ページ
- (33) ボロジェイキン『ノモンハン空戦記』（弘文堂、一九六四）九四ページ。著者は八月二十日頃、ハマルダバの軍事会議でシュテルンが揚言した場に居合わせた。
- (34) 関東軍司令部は450 km離れたタムスクから襲撃し爆弾8発（1発説も）を投下して家屋2が破壊され7人が負傷したと大々的に発表、ノモンハンの大敗北を糊塗するためかとコメントしたが、7月23日のプラウダ紙はフルキ爆撃の風説は虚構だと否定した。日本側にも、タムスク再攻撃を狙った辻の大本営向け謀略ではないかと疑う声がある（たとえば前掲牛島、二二三―二三七ページ参照）。
- (35) 前掲「関東軍機密作戦日誌」七八ページと別紙25、26
- (36) 前掲『関東軍へ1』五九二―九二二ページ
- (37) 前掲クックス上、四〇九ページ
- (38) 前掲小林「ノモンハン出征記」
- (39) 前掲辻、一八〇ページ
- (40) 歩兵第七十一連隊戦闘詳報（防研所蔵）
- (41) 戦史叢書『滿州方面陸軍航空作戦』、二七八ページ、『飛行第十五戦（連）隊史』（一九八七）一四〇ページ
- (42) 前掲『九〇野砲兵士の記録』
- (43) 浜田寿栄雄「ノモンハン事件回想録」（一九六〇、防研所蔵）

- (44) 西浦進『昭和戦争史の証言』（原書房、一九八〇） 八八ページ
- (45) 前掲クックス下、七―八ページ
- (46) 同右、三三〇ページ
- (47) 前掲シュテルン報告書、六〇三ページ
- (48) ソ軍の補給状況については、前掲ジュニコフ六七八ページ、ジュニコフ回想録一二四ページ、前掲プレブ七八ページ、前掲シーキン五一ページを参照
- (49) 自動車第一連隊戦闘詳報、前掲島貫武治回想
- (50) 八・二〇攻勢時の日本軍兵力数については、信頼性の高い公式データを見かけない。推計としては二万数千（中山隆志）、二万二千（小沼治夫）、一万四千（秦Ⅱ森田勉、ただし後方部隊を含まず）、八千（牛島康允、後方部隊を含まず）などがある。
- (51) 前掲鎌倉、一九七ページにロシア軍事史公文書館に所蔵される指令書の全文が収録されている。
- (52) 前掲シュテルン最終報告書、六一二ページ
- (53) 前掲ジュニコフ回想録、一二八ページ
- (54) 石蘭支隊の反乱については前掲『満洲国軍』、蘭星興安会『私たちの興安回想』（一九九九）、前掲プレブ、八六ページ
- (55) 攻勢移転をめぐる軍と師団の論争過程は前掲『関東軍 へ1』六四〇―四三二ページ参照。なお藤本参謀長の意見具申（日付不明だが二十二日か二十三日と推定）は小沼メモに収録されている。
- (56) 八月二十四日の損害をソ連戦史は死傷二八五人、戦車四両と記録している。対応する日本軍の死傷者は七〇一人。
- (57) 前掲扇、二〇九ページ
- (58) フイ高地の戦闘状況については、搜索隊の「戦闘業務詳報」（玉渕軍医中尉作成、防研所蔵）、戦闘詳報に準じる鬼塚智広（初義）『ノモンハンの夕映え』（一九八八）等、工兵中隊の離脱事情は『軍人早瀬多喜男―その美しき決断を偲んで』（非売品、一九八八）を参照

- (59) 井置が九月十四日付で第六軍参謀長へ提出した「フイ高地放棄顛末書」（前掲鬼塚の二五七―五八ページ）
- (60) 前掲プレブ、七二ページ
- (61) 前掲シュテルン報告書、六一六ページ
- (62) 前掲「ソ連側資料からみたノモンハン事件」参照。なお攻勢発起時の北部集団長シェフニコフ大佐は直後に解任され、アレクセンコ大佐に交代したが、その日付は明確でない。
- (63) 前掲シーシキン、七〇ページ
- (64) 前掲「ソ連側から見たノモンハン事件」一〇九ページ
- (65) 前掲丸山、一二一ページ
- (66) 一九八九年、関係者によって『穆稜重砲兵連隊史』（非売品）が刊行され、戦況の一部が復元されている。
- (67) 前掲『関東軍へ1』六九一ページ
- (68) 前掲「ソ連側から見たノモンハン事件」一二二ページ
- (69) 「歩兵第64連隊第I大隊ノモンハン戦闘詳報」（防研所蔵）、なお陸上自衛隊普通科43連隊『歩兵第六十四連隊史』（一九七四）には第II大隊第五中隊の戦闘記録がふくまれている。
- (70) 前掲鎌倉、二〇四ページ
- (71) 前掲辻、二〇八―一〇ページ